◆第7回　受胎率が低下するとお金が入る？(後)

今回は、分娩後のことを考えましょう。

素晴らしい能力の牛を揃えた方は、「受胎率が低下しても、分娩後の人工授精の時期を遅らせる方が、１頭当たりの泌乳量が増え、経営はラクだ」と話しております。正しいでしょうか？

農業共済組合では、分娩後の泌乳量や受胎率に影響する疾患をできるだけ低下させる目標値を示していると思います(例えば、２２群３７７３頭を調べたところ、子宮疾患と卵巣疾患の症率は１８％と１３％で、これによる損失は１頭当たり平均で約５万円と考えられており、農家での飼養頭数を掛けた答えが損失です)。

表１　分娩後の疾患発症率の目標

疾　病	目　標
難産	10%以下
起立不能	10%以下
胎盤停滞	10%以下
分娩後子宮感染症	10%以下
卵巣嚢腫	10%以下

(Radostits,1994)

乳牛は、妊娠中大きくなった子宮を妊娠前の状態に修復(分娩後１５～３０日必要)し、子牛の哺乳のためのホルモン調節(脳下垂体からのプロラクチンと性腺刺激ホルモン)から生殖のための卵巣の機能回復(妊娠継続のための黄体ホルモン分泌から、卵胞の発育・排卵と黄体形成へ)、ならびにそのためのホルモン分泌と体の機能を大きく切り替えなければなりません(この時期を生理的空胎期間と言います)。しかし、この時期多くの牛は問題を抱えております。

分娩後３０～６０日頃は、泌乳量の一番高い時期です(１日当たり４０～８０㌔を生産)。飼料給与の質と量を十分考えないと、体の栄養状態はマイナスとなり病気発症の予備軍を増やすことになります。

この頃の管理の大切さについて(分娩後８５～１００日の間)、北海道農業共済組合連合会と十勝農業協同組合連合会が経済的分析を行なっております。その結果は、牛群平均で１年１産ができなかった農家では１日・１頭当たり１２００円(３６５日より延びた日数)、あるいは分娩後８５日目までに妊娠させる事ができなかった酪農家は１日・１頭当たり１６００円(受胎までの日数から８５日を引いた残りの日数を掛ける)の経費増となります。

表題は、正しいですか？

牛乳１㍑の生産にブドウ糖８０㌘、酢酸２９㌘、ヒドロキシ酪酸１４㌘、脂肪酸４９㌘、ならびに血液４００～７００㍑が必要です。牛の乳搾りは１回当たり１０分間程ですが、この間、ドラム缶２０～３０本分の血液が流れ、灯油缶３～５本分の乳が排出されます(想像もつかない、生体での出来事です)。

このことに感謝し、牛の好む餌の質と量を今一度考えましょう！

農業共済新聞　岩手版　2005 年 10 月 3 週号より